

基調講演 1 〇

いざなぎ流とはなにか

小松和彦 国際日本文化研究センター所長

小松和彦でございます。私がいざなぎ流の研究をはじめてから40年近くになります。1971年、まだ大学院生だったころに高知の物部ものべに行きました。午前中、和光大学のフィールドワークの話をお聴きになった方やこの会場の隣に特設された展示コーナーなどをご覧になった方ならば、なんとなくイメージがつくかもしれませんが、その撮影時よりはるか前の物部です。いざなぎ流の伝承地域は現在の香美市物部町というところですが、その当時は香美郡物部村でした。これまで調査結果を論文で断片的に書いてまいりましたが、いざなぎ流というものが十分に理解できずに今日に至っております。それでも、昨年、いざなぎ流の信仰を伝承してきた物部に関する私なりの歴史的な考察をまとめた本を出し（『いざなぎ流の研究——歴史のなかのいざなぎ流太夫』角川学芸出版、2011年）、ちょっと一息ついたところではあります。

このように長い付き合いですので、物部といざなぎ流についてはいろんなことがあって、30分でいざなぎ流の話をせよといわれるのはとてもつらいのですが、これからのディスカッションの基礎知識とも前振りともなると思われることを、本当に短い紹介ですが、いざなぎ流とはなにかということ、スライドを見ていただきながらお話しさせていただきます。

—— 物部とはどんなところか

写真1をご覧ください。このように、非常に山深いところにあるのが物部という地域です。旧村のほとんどが森林に囲まれていて、よく人が住めるものだと思うところにへばりつくように集落がポツポツと点在しています。四国の山というのは険し



写真1 物部の険しい深く険しい山と谷

いV字谷になっております。関東や関西の山というのは比較的緩やかなのですが、それに比べますと、ものすごく深い、きついという感じがいたします。

地図1をご覧ください。これは旧物部村地域が四国のどのあたりにあるかを示したものです。いざなぎ流が伝承されている地域は、高知県の東部、今申しましたように香美市物部町、旧物部村の南側半分に当たります。今は高知龍馬空港と言っている高知空港は高知市の東のほうにあり、南国市に位置しておりますが、そのすぐ東側に物部川という大きな川が流れていて、その川の上流がこの地域に当たります。中世から、^{まきやまこう}横山郷という地名で呼ばれておりました。しかも、それは大忍荘と呼ばれる^{おおさとのしょう}荘園の山側の部分になっておりました。近世には横山郷の全体を統括するために大栃という、^{おおどち}横山郷の村の入り口にあたるところに大庄屋が置かれておりました。それから東の物部川の上流域——横山川とも呼ばれていますが——に点々と集落が存在しておりまして、それぞれに庄屋に当たる^{なもと}名本といわれる者がその地を支配しておりました。

今日いざなぎ流と呼ばれている信仰は、神社や旧家でさまざまな祭祀をおこなうだけではなくて、病気治しなどのさまざまな呪術・祈禱もおこなうわけですが、そのいざなぎ流を伝承する人を「太夫」と呼んでいます。この村に生まれ育った者がそういう知識を持った人に弟子入りして、その信仰を学び取るという形で伝えてきたものです。

このような信仰がどこでどういふふうに使われたのか、まだよくわかっておりません。どこが中心だろうか、この物部の地域が中心だったのか、現在この信仰は衰えているけども、隣の村や町でひょっとしたらかつて盛んにおこなわれていたのか、いろんな可能性がありますので、物部の周りの村々を歩いたりしてみたのですが、私の印象では、やっぱり横山川流域がいざなぎ流の信仰活動、つまり太夫たちが一番活躍していた場所ではないだろうかと思われま。現在では細々したものになっていますが、昔はたくさん太夫たちがいて、その残存が現在に伝えられているものだというふうに思っております。

地図2をご覧ください。旧物部村の地図です。物部の場所は、高知県



地図1 香美市物部町 (四国全図)



地図2 旧物部村略図

の、高知市から見て東北部の、徳島県との境に位置しています。北側は観光でも知られる祖谷山地域で、かづら橋があったり平家の落人伝承があったりするところです。最近では子泣きじじいという妖怪の伝承地であったというので、妖怪で町おこしをしようとしている、そんな地域です。その南側が物部です。私が調査していたころは両地域は婚姻関係も結構あったところですね。



地図3 大忍荘の荘域図

物部村のうち、北側は^{かみにろう}旧上葦生村、南側が^{まきやま}旧横山村にあたります。横山川と上葦生川が合流しているところに、先ほど述べた大筋という集落があります。ここが村の中心地で、そこから東、横山川沿いに点々と集落があって、一番奥が別府^{べふ}という集落で、この先には四ツ足峠という大きな峠があり、それを越えた先が阿波、徳島県になります。

地図3は、中世にこのあたりに存在していた大忍荘という荘園の荘域図です。荘園の南西の端、海岸部に赤岡という集落があります。この荘園はとても細長い荘園で、荘園の中央部から東のほう、山間地帯を山分、平野部を里分と呼ぶこともなされています。里のほうは稲作ができるのですが、山のほうに入ると多少は稲作もやっておりますが、ほとんどは雑穀の類を栽培したり林業等で生計を立てていたというような地域です。

—— 私が調査に入ったころ

私は1971年に調査に入って、いくつか拠点を決めて民宿しながら1か月とか数週間ずつ調査を繰り返してきました。私が調査拠点の一つとした一番奥の集落の別府を、国土地理院提供の航空写真(写真2)で見ますと、このような蛇行した川の奥にあります。バスの終点の停留所の周辺にちょっと開けたところがあり、

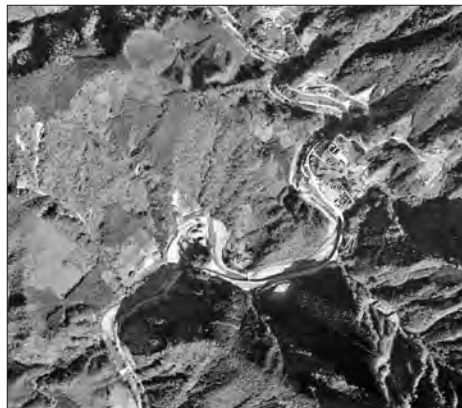


写真2 別府付近航空写真(1975年)中央部が野地

昔はこの地区には営林署の人たちの宿舎がたくさん建っていました。林業が盛んだったのです。もっとも、その後、安価な外材に押されて、急速に林業が不振に陥り、営林署の事業が縮小されることになるわけです。ここは野地という^{あざち}字地で、ここに別府集落の氏神が祀られております。このあたりはその後埋め立てられて、現在は「べふ峡温泉」という宿泊施設ができています。私も今はここに泊まるのですが、昔は宿屋がまったくありませんでしたので、この辺にある民家に泊めていただいていた。

写真3は、その別府のバスの停留所の辺りの風景です。すぐ近くに営林署の宿舎が建ち並んでいたのですが、今はもうほとんど払い下げられたり取り壊されたりしています。その施設が建っていた背後は切り立った谷になっています。しかも、この辺は非常に霧が多い地域で、いつも霧に包まれて集落が隠されています。平家の落人の住み着いたところなどといわれるのですが、なるほどと思わせるような所です。深い霧の中からぽっかりと集落が姿を見せるというようなところで、なかなかいい感じの集落があちこちにありました。

写真4は、横山川の中流域の^{せんどう}仙頭という、中世から近世にかけてはこの横山筋で屈指の村があったところを押谷側から遠望したものです。私はこの集落がとても好きです。というのは、ここは中世あるいは近世の集落の面影を残すとても興味深い場所だからです。中世の豪族の「専当」と呼ばれた名主家の屋敷があったところ。名主とは今でいう村長みたいな人のことで、その一族郎党がその周囲に家を構えて、名主を守るかたちで生活をしていました。そして、名主の氏神社や氏寺もありました。

この会場の入口にゆずが置いてありましたね。物部では、現在はゆずの栽培が盛んになっており、仙頭でもゆずが盛んに栽培されています。ですが、それ以前は棚田が広がっていました。棚田になる前、中世では違う作物も栽培されていたのではないかと思います。だいたい昭和40年代以前の写真を見ますと、きれいな棚田、段々畑がつくられておりました。写真の中央上方、集落を眺め渡すことができる高い所に、土居と呼ばれる名主（庄屋）屋敷があります。また、写真の右手側の小山の



写真3 バス別府終点付近の営林署宿舎（1971年）



写真4 仙頭本村遠望 中央上方が土居

麓に、氏神社があります。

写真5は、戦後間もないころの別役べつやくという集落の写真です。宗石太榮さんから提供していただいたものです。この集落は、国道から歩いて1時間ぐらい山を登っていった、山の頂上に近いところにあります。この集落が、霧に包まれていると、平家の落人たちはこんなに山深いところに住み着いていたのだろうか、



写真5 別役本村遠望（1951年）中央の白い屋根が土居

と思わせるようなところですが、山の上のほうに集落をつくるというのは理に適っていて、山深いところでは谷底にはほとんど陽が当たらないのです。ですから、上のほうの陽の当たるところで、かつ水が確保しやすいようなところに集落をひらき、そして焼畑をおこなっておりました。この集落も焼畑がやりやすいような場所ということで定住したのだらうと思われま

す。過疎化が進み、現在ではわずか8戸しか人家はないそうです。このため、かつては耕作地であったところのほとんどが森に包まれてしまっています。山間地域の、とりわけ過疎地域では、人が住まなくなると山の手入れをしなくなる。そうになると野生動物がどんどん集落まで出てきます。自然の力に対抗する力が衰退してしまったので、自分の家の周りのわずかなところだけを耕し、その周りに柵やネットをして動物が入れないようにしている。今ではそういう光景があちらこちらで見られます。やがて、高齢の方が一人、二人と減って、ついには廃墟となり、物部のほとんどの地域が森になってしまうのでしょう。

——いざなぎ流とは

いざなぎ流を伝えてきた地域は、このような場所なのですが、さて、それでは、いざなぎ流というのはどのような信仰なのかということ、以下、簡単に説明したいと思います。いざなぎ流とは、太夫たゆうと呼ばれる、この地域に住んでいる在地の宗教者たちが、いざなぎ流と称する信仰知識およびその信仰知識に基づいて宗教活動をする、その全体を表しております。知識とそれに基づく宗教的実践活動、これが、いざなぎ流ということを考えていく上での基本になるかと思ひます。在地とは、この土地で生まれ育ったということで、そのような者が、その知識を持っている在地の人のところに弟子入りし、その知識を受け継ぎ、また自分のところに弟子入りした人に対して伝えるという形で伝承してきたのが、いざなぎ流なのです。

私がいざなぎ流というものを詳しく知りたいと思ったときに、弟子入りしたほ

うが早いのではないかと考えましたが、弟子入りするとそのメリットと同時にデメリットもありますので、弟子入りは止めました。弟子入りして一人の太夫さんの知識を深く知ろうとすると、ほかの太夫のところに行っちゃいけないといった規制を受ける。ですから、その太夫さんの知識を深く知ること



写真6 いざなぎ流の太夫たち

とはできるのですが、ほかの太夫さんと比較したり、あるいはほかの太夫のところへ出入りすると破門されてしまい、今度行っても教えてくれない。そういうデメリットがあるのです。私自身はあちらこちら行って、できるだけたくさんの方の知識を、比較しながら研究するという形でこのいざなぎ流のことを研究してきました。

ところが、つぎにお話しされる斎藤英喜さんがとられた調査方法というのは、半ば弟子入りするというものでした。

40年前にはたくさんの方の太夫さんがおりました。80歳代ぐらいの人から50歳代ぐらいの人まで、私が知っているだけでも数十人という太夫さんが活動しており、中には読み書きも十分にできないような太夫さんもおりました。しかし、ものすごくたくさんの方の知識を持っている。すべて記憶で、口頭伝承でこれを身に付けているのです。今から思いますと、あのときもう少しちゃんと話を聞いて録音しておけばよかったと思います。ほんとうにちょっとしかその伝承知識を聞き取っていません。写真6のような太夫さんがたくさんいたのです。

——いざなぎ流の祭儀

いざなぎ流の特徴を述べますと、その一番重要な点は祭儀にあるということです。祭儀がおこなわれているから、いざなぎ流が生きていると言ってもよいでしょう。私たちは今、祭儀とか神楽とか言っておりますけれども、地元では「祈禱」と呼んでおります。私たちが考える祈禱よりも広く、お祭りも祈禱と呼んでおりますので、彼らがおこなう宗教的、実践的な活動をひっくるめて「祈禱」と表現しているのだと思えます。先ほど、いざなぎ流の舞神楽を見ていただきましたが、家々や集落の氏神様とか、そういったところでの祭りの核心部分が神楽なのです。しかしながら、いざなぎ流の祭儀の仕方はまことに複雑な形をとっており、神楽の中身もかなり違ってあります。

先ほど見ていただいた舞神楽というのは、一つの神楽、これはだいたい2時間ぐらいかかるのですが、その神楽の終わりの部分でおこなう舞の部分を取り出し

たものです。これが一番芸能的な性格がある部分なので、それを取り出して見ていただこうとしたものなのです。いざなぎ流の神楽とは舞神楽のことだと思われていた方がおられるかもしれませんが、そうではなく、神楽の本体部分は別にあり、その神楽の一番最後の最後のところでなされる舞を舞神楽と呼んでいるのです。



写真7 本神楽（御崎の神楽）

じつは、本体をなす神楽はまこと

に退屈なものです。写真7は、その様子を撮ったものです。ほとんど2時間近くの間、ただ体を左右に振りながら、延々と唱え事をしているだけなのです。しかも、その唱え事も、たいていはぶつぶつと小声で唱えているので、側にいてもどのようなことを唱えているのかわかりません。はっきりと唱えてくれる太夫であれば、録音・録画することもできるし、また神楽の進行状況もわかるのですが、そういう太夫はほとんどいません。ですから、神楽はとても退屈で眠たくなります。眠るための儀式と言えるかもしれません。

ところが意外なことに、その神楽の輪の中に入れてもらって、笠をかぶって御幣を振ってみたことがあるのですが、中に入って周りの人の言葉についていこうとしておりますと、意外に時間の流れは速いのです。2時間ぐらいいじっとそばで聞いているのは退屈でつらいのですが、なかに入って神楽をやってみると楽しいものなのです。神楽で神々をもてなしているという感じがなんとなくわかってきます。

もう一ついざなぎ流の特徴をなすものに、「式法」と呼ばれるものがあります。これはお祭りではなくて、たとえば病気になったりしたときに、その病気を治すための祈禱法です。広い意味では「呪術」と表現したほうがいいのかもしれませんが。「法術」などともいったりします。「法」という言葉は、陰陽道、あるいはそれ以前の、中国から入ってきた「呪禁」の知識、道教的な信仰知識の流れを引き継いでいるのかもしれませんが。式法は、一般的にはシキという言葉で表現されています。この式法はさまざまな精霊を操作する方法のことで、これによって、病気を治したり、呪いをかけたりします。数年前に、陰陽道ブーム、安倍晴明ブームがありましたが、陰陽師が使うということで有名になった「式神」と文化史的にはつながっているものです。

いざなぎ流の祭儀の構造は、たいへんに複雑です。旧家の祭りとなると、たくさんのお神様を祀っているので、祭りの準備から片付けまでを含めると1週間ぐらいいゆうにかかることがあります。1週間もかかると、太夫さんを数人雇うための費用も非常に高額になります。100万円くらいはかかるのではないだろうかと思

います。

いざなぎ流の祭りの大きな特徴は、「取り分け」と呼ばれる儀式をはじめにおこなうことです(写真8)。取り分けは、お祭りのための掃除の儀礼とみなすことができるでしょう。自分の神社だったり、招かれた家だったりの穢れけがを全部集めて取り除くことなのです。穢れは目に見えません。見えないのですけれども、しかし、穢れのたぐいを集めて、それを取り除く儀式によって、非常にきれいな状態でお祭りを始めるのです。この取り分けが終わると、本当のお祭りがあります。このように、本祭りと呼ぶ祭儀部分と清掃部分の取り分けとは、ちゃんと区別されているのです。

取り分けが終わると、祭りに入ります。ここから太夫たちは、注連縄を張りめぐらした舞台のなかで、いざなぎ流太夫の正装である笠を手にして、円座になって神楽をします。神楽の最初は「礼神楽」と称し、「これから、お祭りを始めます」ということをおこないます。これは、祭りに用いる祭具である、笠や太鼓、注連、錫杖鈴などの本地つまり神話を唱えてそれらを活性化することを目的としています。また、「湯立て」もします(写真9)。これは「湯立て神楽」と呼ばれています。湯立てをすることから考えて、西日本地域では湯立てをおこなう神楽が非常に多いので、そのような神楽の流れを汲んでいることがわかります。

こうしたいわば導入的な神楽をした後に、ほんかくら「本神楽」に入ります。本神楽は、家で祀っている神々のための祭りで、オンザキ「御崎様の神楽」や「天の神様の神楽」「ミコ神様の神楽」など、家によって多少違いがみられますが、次々におこなっていくわけです。このような神楽の舞台には、ばっかい「白蓋」と呼ばれる、一種の天蓋が



写真8 取り分け



写真9 湯立て



写真10 バッカイ(白蓋)

つるされ、神楽はその下でおこないます(写真10)。

このように、いざなぎ流祭儀は、旧家の祭りであっても、非常に複雑な形を取っております。山本先生がさきほどふれましたように、今日の催しの最後に実演してもらうことになっている「えびすの倉入れ」は、こうした一連の祭儀の最後のほうでおこなわれる神楽です。そして、お祭りの最後には、「荒神鎮め」(写真11)という、五方を鎮めるといふ儀礼をして、終わりとなります。

また、特別に「日月祭」ということもしくはない旧家もあって、この場合は、室内ではなくて、庭に三階の棚を作り、その前を舞台にして、出てくる月を礼拝するということをします(写真12)。

「ミコ神の神楽」は、その家の者で太夫さんであった者、あるいはそれに準ずる人である家の当主を、神様(ミコ神)に祭り上げるための神楽で、これも複雑な構造をもった祭りです(写真13)。

——「祭文」と「御幣」

いざなぎ流のもう一つの大きな特徴は、「祭文」と呼ばれるものが多数伝えられていることにあります。いざなぎ流では、いろいろな神々を舞台に招きます。そして、その神々に対して、その神を喜ばせることをする。それが神楽なのですが、とくに神々が喜ぶのが祭文を読んで聞かせることだと考えています。祭文は神々ごとにあり、例えば、山の神様を喜ばせるには「山の神の祭文」を読み聞かせることが良い、とされています。このためにたくさん種類の祭文があるのです(写真14)。その祭文を読み聞かせることが、祭儀の一部として織り込まれています。祭りの根柢を語り示しているものが祭文であり、太夫さんの宗教活動の根柢を与えるものが祭文なのです。



写真11 荒神鎮め



写真12 日月祭の祭壇と舞台



写真13 ミコ神の取り上げ

いざなぎ流にはたくさんの祭文がありますが、いざなぎ流七通りの祭文といって、七つの祭文が非常に基本的で重要な祭文になっております。また、呪詛、呪いの信仰や呪法に根拠を与えている祭文もあります。

そのほかにも、祭文とは称しつつも、中身は「式法」あるいは「呪法」とみなせるような唱えもあります。雨乞いや病気の治療のために唱えるものもあります。例えば、写真15の書物は「生霊犬神四足の祭文」と題されていますが、これを見てみると、犬神をどういうふうにするれば退散させることができるかというようなことが書いてあるのです。祭文の内容も多種多様なのです。

もう一ついざなぎ流の大きな特徴として、御幣があります。儀礼に用いられる御幣なのですが、これがたくさんの種類があるのです（写真16）。



写真14 さまざまな種類の祭文

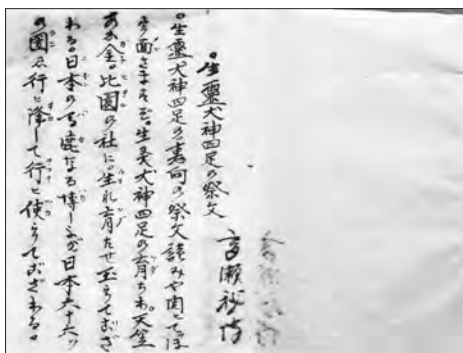


写真15 生霊犬神四足の祭文



写真16 さまざまな種類の御幣

御幣は用途で異なった形をしているのですが、中には人形のようなものもあります。先ほどの舞神楽でも飾られていたのをご覧になったかと思いますが、三人一組になった、目鼻がついた人形みたいなものが舞台を囲む注連縄の四方に飾られています。これも御幣の一つで、「コミコの幣」とか「十二のヒナゴの幣」と呼ばれるものです。これを設置することで、外から襲ってくる悪い霊の侵入を阻止するのだとされているのです。式神の一種みたいなものです。

御幣は、言ってみれば、紙でつくった神像なのです。仏像などは恒久的な材料でつくられますが、これは紙製ですので、儀礼のときだけつくられて、儀礼が終わると捨てられてしまいます。そのときだけ姿をしている神の姿なのです。じつにさまざまな御幣人形や御幣呪具があります。それに悪霊やケガレを封じ込めて、川に流したり沈めたりもする。それはミテグラと呼ばれます。御幣は、いざなぎ流の祭りを賑やかにする飾りの意味もあります。私はこの御幣を一種の宗教芸術とみなしています。

以上、手短かにいざなぎ流の特徴を説明してみました。いざなぎ流はその祭儀と式法、祭文にあると思います。また、いざなぎ流は特殊な信仰・祭儀のように思われるかもしれませんが、それをじっくり分析していきますと、その彼方には、日本の宗教伝統というものが見え隠れしていることがわかります。今はこの地域にしか残っておりませんが、おそらく四国の山間地域にはこれと似た信仰が、近世には、もっともっと豊かな形で、多くの宗教者たちによって伝承されていたのかもしれません。

私の研究した限りでは、いざなぎ流と呼ばれる信仰の特徴というのは、だいたいこんなものではないでしょうか。時間が来ましたので、これで終わります。

[こまつ かずひこ]